【熊本国税局長賞】

税は助け合いのカタチ

椎葉村立椎葉中学校

三年 尾前 結來

私たちは、気づかないうちに税の恩恵を受けている。私は今までそれに気づくことが出来なかった。税金は負担であり、返ってくるのではないお金なのだと思うていた。理由は、義務教育が終わるとお金がかかるようになるし、医療費もそれなりにかかるからだ。しかし、身近なところに税金が使われていることを今の私は知っている。

私は家から学校までが遠いため、中学生ながら寮で生活している。寮費は月千五百円とても安い。なぜかと母に尋ねてみると「村がお金を出してくれているから。」と答えてくれた。私は不思議に思った。村にそんなにたくさんのお金があるのだろうか。寮生は三十人程度で電気も水も食事もおやつもある。しかし、私の住んでいる椎葉村は、日本三大秘境の一つであり森林が九割を占めていて商業施設も少なく、お金はあまりないイメージだ。調べてみると「地方税法」という法律の中で集められたお金と、国からもらう税金でまかなわれていることを知った。地方税にたばこ税、入湯税、狩猟税、軽自動車税などそんなことにまで税金を払うのか！とびっくりしたのもあった。しかし、そんなたくさんのお金のかげで寮があり、毎日学校に通えているので感謝したい。

また、「地方交付税」という地方団体間の財源の不均衡を調整している制度を知った。全くかわりのない人が知らない間に私の地域を助けてくれているかもしれない。そう感じた。さらに二十二年九月、台風十四号によって多くの被害が出た。私の家の近くでも橋と道路が崩壊し、跡形もなくなっていた。祖母に工事にかかるお金を尋ねると、数億、数十億円と言った。その時私は税金のことなど知らなかった。いっこうに工事が始まらないことから「小さな地域はお金が足りなくて工事ができないのかな。一生このままなのかな。」と不安と悲しみを抱いていた。そして工事が始まってでもそれはすべて会社のおかげなのだと思うていた。後に国や村、自分じゃない誰かからの税金や義援金であることを知り、私たちを助けてくれる人は日本中にあることを実感してすごく嬉しかった。税金があるのと無いのではこんなに安心感も住環境もちがうのかと体感した。だから税は必要なのだと思う。

このように私たちの周りには税の恩恵があふれている。他にも、直接関係するものではないが、私たちのために税金によって支えられているものもある。警察官や政治家のお給料もそうだろう。税は目に見えないが、人はいつも誰でもどこにいても税に支えられて生きていく。だから、税は「国と地方と人を繋ぎ、お互いがお互いを助け合うもの」であると考える。そして私は、たくさん感謝をして大人になったら働いて税金を納めて恩返しをする。